海図図式の改版について

坂戸直輝*

About the Revised Edition of Symbols and Abbreviations
Used on Japanese Nautical Charts

Naoteru SAKATO

Abstract

Chart No. 6011 "Symbols and Abbreviations used on Japanese Nautical chart" was published in 1957 according to the Standard List of Symbols and Abbreviations based on the Repertory of Technical Resolutions issued by the International Hydrographic Bureau (I.H.B.).

Since then, as the Repertory was revised and its contents have been renewed, our chart 6011 had to be revised accordingly. Thus, we are now working to revise it.

The principle of this revision is to adopt I. H. B. symbols as possible as we can.

The author here shows the type, arrangement, contents and index of the sheet, together with some actual examples of the new symbols adopted.

1. ま え が き

海上保安庁水路部で現在刊行している海図第6011号「海図図式」は、国際水路局 (International Hydrographic Bureau—略して I. H. B. といっている) で刊行の技術決議集中に規定してある、「記号・略語基準表 (Standard List of Symbols and Abbreviations)」に基づいている。この「記号・略語基準表」は、いわゆる日本でいう「海図図式」のことである。現行の海図図式は、昭和32年に、はじめてこの様式によつて改版したもので、それまでは水路部創立以来日本独自の様式で、出版していた。現行の図式は、その意味で、その改版にふみきつたことは、日本の海図図式史に一大エポックをきたしたものと見てよい。

しかし、その図式も改版後数年を経た今日、技術決議集等の内容もその後改廃された箇所が多くなり、さらに最新のものに改版しなければならなくなつてきた。従つて昭和39年度にその改版計画が立案され、幾多の論議の結果その成案がまとまり、現在その作業を実施中である。

2. 改版の主眼点

今回の改版の主眼点は、現行の海図図式に、国際水路局ですでに決定されている記号・略語の中で、未採用のものを、特別のものを除いて、できるだけ採用したことである。従つて従来のものに比べ、量的にいつて、大分ぼう大なものとなつた。

3. 記号・略語の基準表

* 海上保安庁水路部 (東京都中央区築地5丁目)

国際水路局できめてある、記号・略語の基準表について簡単に説明しておこう。

1953年（昭和28年）1月、国際水路局では各国水路部で発行する記号・略語の基準表を作成して、各加盟国水路部に配布し、これに従って配列した海図図式を刊行するように決定した。現行版の海図図式を一見すれば、すぐわかるが、図式を項目別にAからVまでに分け、さらに各項目の中を1から一貫番号を一つ一つ付与して細かい項目にまで、分けている。たとえばAの1は未測岸線の記号を示し、Cの15は湖の記号を、またLの2は灯浮標の記号を表わすといったように……。この文字と数字の配列がすべて国際的に共通になっているので、言葉が全然わからない外国で発行している海図図式でも、その文字と数字との組み合わせによつて、たとえばAの1は未測岸線の記号を示し、Lの2は灯浮標の記号を示すというように記号そのものは違つていても、配列が全く共通しているという特長をもっている。従つて、その国の言葉がわからなくても、その国の海図を使うに際して、その国の海図図式があれば、日本のそれと対照することによつて、容易にしかも安心して使用できるという便利さがある。これは、とりもなおさず海図の国際性のあらわれでもあろう。

4. 今回の改版について

第1節でのべた、現在改版作業中の海図図式について、おもな点をのべる。

（様式）一枚刷りの形式（図積全紙（96cm×63cm）海図）とするが、折りたたんだ小冊子としても使用できるよう、その大きさが水路書誌程度になるようにしてある。現在のものは図積 $\frac{1}{2}$ （63cm×46cm）の大きさであつたが、今回のものは国際水路局できまつている基準表を全部網羅したので全紙の大きさにしなければ収容できなくなつた。

（紙質）一般航海用海図と同一、多色刷りとする。

（配列）大略現行のものと同一とする。すなわち総記をまづ掲げ、次に国際水路局で規定した各項A～Vに分類した。ただし、図式の最後に新たに略語のアルファベット順の索引を付け加えた。

国際水路局で規定した各項を参考までに記載する。

- A 岸線（海岸の性状） The Coastline (Nature of the coast)
- B 沿岸地形 Coast Features
- C 陸部（地形） The Land (Natural Features)
- D 基準点 Control Points
- E 単位等 Units, etc.
- F 形容詞、副詞等 Adjectives, Adverbs and Other Abbreviations
- G 港湾 Ports and Harbours
- H 地物（施設） Topography (Artificial Features)
- I 建造物 Building
- J 各種の部署 Miscellaneous Stations
- K 灯 Lights
- L 浮標および立標 Buoys and Beacons
- M 無線局およびレーダ局 Radio and Radar Station
- N 霧信号 Fog Signals
- O 危険物 Dangers
- P 境界線等 Various Limits, etc.

Q 水深 Soundings

R 等深線および着色 Depth Contours and Tints

S 底質 Quality of the Bottom

T 潮汐および海潮流 Tides and Currents

U コンパス Compass

V 特殊外国用語 Special Foreign Terms

換算表 Conversion Table

略語索引 Index of Abbreviations

(刊行後の維持) 改訂の都度水路通報により注意深く最新に維持することには従来と変りない。

以上の体裁であるが、今回の改版中、現在の様式と著しく変更をして規定したものについて、次に具体的ないくつかの例を示して説明しよう。

5. 内容の訂改箇所

細部は別として、航海上関係の多いものを取りあげて、以下に説明する。

項 目	改 訂 案	現 行 様 式	備 考
総記 水深の端数	20.9mまでは小数1位をつけ、21m以上は小数をつけない。端数は、すべて切り捨てる。	15m未満は小数1位をつけ、15m以上は小数をつけない。端数は、すべて切り捨てる。	1962年の国際水路局（以下I.H.B.と記す）会議で次のように決議された。 「水深をメートルで表わす海図では、縮尺の許すかぎり、航海者に役立つと思われる地域では、小数を伴う20m未満の水深にデシメートルの数字（0以外）を記入すべきことに決定する。」
樹林の高さ（樹頂、著樹の高さも含む）		248 (樹頂)	1961年にI.H.B.で次のように決定された。 「森林地帯において、図上に示す高さを樹頂で示すことを望むときは、他の陸上の高さと同じ形式で示し、上に横線を付加すべきことに決定する。」
基本水準標		○ B.M.	1929年にI.H.B.で、すでに決定された記号であるが、採用しないで現在まできていた。
錨泊場所	⑫ (紫色とする)	記号は未決定	I.H.B.では の記号であるが、複雑すぎるので、簡明なものをえらんだ。数字はバース番号を示す。
検疫所		記号は未決定	1956年にI.H.B.で、すでに決定された記号であるが、採用しないで現在まできていた。

項 目	改 訂 案	現 行 様 式	備 考
港長事務所		記号は未決定	1956年に I. H. B. で、すでに決定された記号であるが、採用しないで現在までできていた。
灯台、灯浮標の位置を示す灯色およびその形	灯色は紫色とし、形は (光ぼうの形) とする。	灯色はオレンジ色、形は である。	1947年に I. H. B. で紫色を勧告し、1957年に形を (光ぼうの形) にすることを勧告している。(注1)
灯に関する略記	灯色は「小文字体」とする。 (例) Gp. Fl. r. (2) 15 sec 19m	灯色は「大文字体」である。 (例) Gp. Fl. R. (2) 15 sec 19m	1916, 61年に I. H. B. で、すでに決定されていたが、採用しないで現在までできていた。
レーダ反射器		○ Ra. Ref.	1957年に I. H. B. で表記の記号に決定されていたが、採用しないで現在までできていた。 この記号の色は「紫色」にすることを勧告している。
推薦航路(浮標・立標で示さないもの)	上の記号は一方通航を示し、下の記号は往復通航を示す。 方位を付記する場合はすべて小数端数を用いる、分数は、やめる。	方位を付記する場合は分数端数を用いる。	1957年に I. H. B. で決定されていたが、採用しないで現在までできていた。 浮標・立標で示すものは従前通りである。 I. H. B. では別に規定していない。
掃海的測量区域	緑色の実線でその区域を囲んで示す。	記号は、きまつていなかった。	日本の水路部独自の記号でごく最近決定したものである。
潮流矢符等に付記する流速数字	小数端数を用いる。 (例)	四分数端数を用いる。 (例)	I. H. B. では別に規定していない。

項 目	改 訂 案	現 行 様 式	備 考
コンパス	別図 (I) 参照	別図 (II) 参照	I. H. B. では別に規定していない。

(注1) 灯台の記号は $\star$ $\star$ $\bullet$ の3種が決定されており、日本は $\star$ または $\star$ を採用している。

なお、I. H. B. では、灯の位置の上に色を塗る場合（水路部では灯色といっている）は正しい位置を黒点で示せば十分であるべきことに決定されている（1952年）が日本では、黒点は使用せず、すべて $\star$ または $\star$ で図示している。

別図 (I)

別図 (II)

6. む す び

以上で現在改版作業中の「海図図式」の内容について、概略の説明を終るが、最後につけ加えておきたいことがある。

今回の改版は第2節でのべたように、その掲載した量が、ぼう大であるため一見して、つい分無駄なものが記載してあるように思われるかも知れない。しかし、さきに説明したように、国際水路局で作成した「記号・略語の基準表」に所載のものは、もれなく掲載したので、記号・略語の未だ決定されていないものなどについても、その対訳表としてこれを利用することができ、いわゆる「水路用語対訳表」として大いに活用していただけるものと考えている。従つて内容は現行版よりも数段充実したものといえるであろう。

この改版が完成し、出版の暁において、実際使用される航海者諸兄が、「大分いろいろ掲載してあるが、便利になった」と思つて使用して下されば、この改版計画に関係したものとして誠に

意を強くするものである。

図式に関連するいろいろの問題、国際水路局との関連、外国水路部出版の図式などについて、御意見、御質問がある場合には、どんなことでも、海上保安庁水路部図誌課筆者宛御連絡を賜るようお願いして筆をおく。